

アフリカろう教育の父

フォスター

亀井伸孝

1950年代から80年代にかけて、西・中部アフリカの広範な地域で、あるささやかな人口集中と言語伝播が起こった。そしてこの広い地域の言語分布が変化した。本論は、限られた資料から、この出来事的一端について報告するものである。

1 ろう者のコミュニティと手話

本論のテーマは、ろう者の言語である。世界各地の耳の聞こえない人々が、手や顔の動きを用いた視覚的な自然言語を話していることが知られている。これらは「手話」と総称されている。

耳の聞こえない人の集まりで手話言語が話されるようになるプロセスを、大きく三つに分類することができる。最も基本的な形態が、手話の伝承である。ある地域のろう者の集まりが手話を話していれば、その地域の耳の聞こえない若い世代は、この集まりに加わって手話を覚える。手話は基本的に、同じ地域のろう者の世代間で伝承されている言語であると言える。第二に、手話の伝播が起こることがある。ある地域に別の地域の手話をもたらされ、話されるようになる。これは他地域からのろう者やろう教育者の移入がきっかけとなる。そして第三に、新たな手話言語の創造である。手話

の伝承も伝播も起こらない状況で、言語を持たないろう児童が一カ所に集まると何が起こるだろうか。こどもたちの間に自然と手を使ったコミュニケーションが生まれ、やがて文法をそなえた言語である手話へと発展していく。1979年にニカラグアではじめてろう学校が作られたとき、生徒集団の中で、自然発生的な身振りを元にした新言語が誕生する様が見られている（ピンカー[1995:45-46]）。

こうして世界各地のろう者の集まりが、地域ごとに異なる多くの手話言語を生み出した。その数はまだ明らかでないが、「日本手話」「アメリカ手話」など、すでに名前の付いたものだけでも114言語を数える（Ethnologue [2002年8月9日閲覧]）。これらの手話は、ろう者の世代を超えて伝承され、また空間を越えて伝播し、各地の集まりの中で話されてきた。

2 ろう学校の二つの機能

このようなろう者の集まりがどのように生じるかを考えるとき、重要な意味を持っているのが、ろう学校である。ろう学校は耳の聞こえないこどもたちのための学校だが、これには二つの機能がある。

第一の機能は教育である。教育は通常、学力や技能を身に付けさせることを目的とする。しかし19世紀後半以降の多くのろう学校では、ろう者になじまない音声言語の習得が主な目的とされ、声を出し、口の動きを読み取る話し方(口話)の訓練が行われてきた。ろう者が自然に獲得する言語である手話を学校の中で用いないばかりか、その使用を禁止するなど、全般的に手話を否定する傾向が強かった。つまり、ろう教育それ自体は、ほとんどの場合手話を擁護してこなかった。

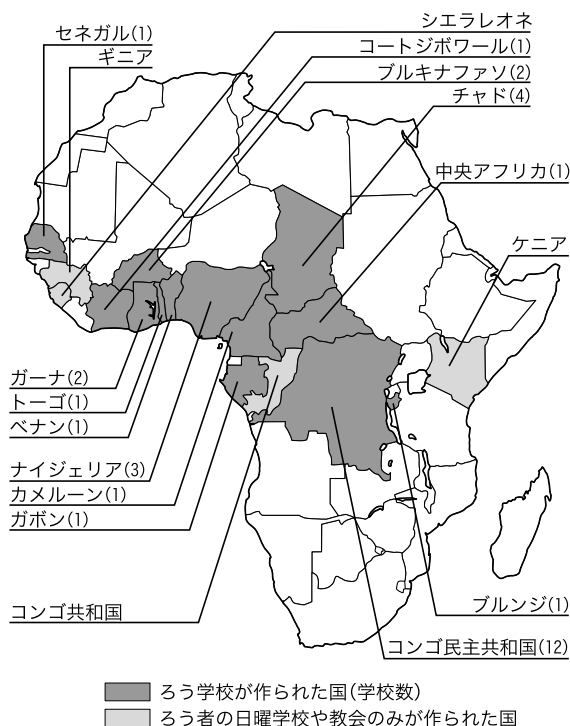
たゞしろう学校には、もう一つ別の機能がある。ろう者が集まって出会う機会を提供することである。聞こえないこどもの比率は人口1000人に1人と言われる(野村ほか編[2000: 425])。地域に散らばる聞こえない人々が、ろう学校のある都市に転入したり、ろう学校の寄宿舎に入ったりすることで、集まりを作る。その結果、学校やその周辺で手話が生まれたり、また伝承や伝播が起りやすくなったりする。ろう学校は、目指してきた教育とは別のところで、ろう者が手話を話すための素地作り貢献してきたのだった。

1950年代から西・中部アフリカで起きた一連の出来事とは、各地にろう学校が建設され、ろう者のための教育が開始されるとともに、広範囲に手話の伝播が起こったことである。

3 アフリカろう教育の父フォスター

アフリカのろう教育史については、まだ明らかになっていないことが多い。すでに19世紀には英領ケープ植民地(現南アフリカ共和国)にイギリス系白人ろう児のための学校が設立されている(Van Cleve ed.[1987: vol. 3: 84])。しかし黒人のためのろう教育の記録が現れ始めるのは、20世紀半ば以降である。この時期にアフリカにろう教育を

「ろう者のためのクリスチャン・ミッション」が活動した国々



(注) これらの国々にアメリカ手話が伝播したと考えられる。「Christian Mission for the Deaf」ウェブサイト掲載情報に基づいて筆者が作図(2002年6月27日閲覧)。

普及させることを自らの使命とした人物がいる。「アフリカろう教育の父」と呼ばれるアンドリュウ＝J＝フォスター博士(1925～87年)だ。彼自身、ろう者であった。

フォスターはアメリカ合衆国アラバマ州生まれの黒人である。アラバマの有色人ろう学校を経て、首都ワシントンD.C.にあるろう者の大学、ギャローデット大学に進んだ。黒人ろう者として初めてこの大学を卒業した人物としても知られている。彼は、アフリカのろう者が教育を受け、手話を通して神の福音を受けられるよう願った。そして「ろう者のためのクリスチャン・ミッション」(CMD)を設立し、生涯をアフリカのろう教育事業に捧げた(Van Cleve ed.[1987: vol. 1: 430-431], CMD

ウェブサイト [2002年 6月27日閲覧], Lane et al. [1996: 199])。

フォスターはアフリカで二つの画期的なことを行った。一つ目は、ろう教育が普及していない西・中部アフリカの国々に、寄宿舎付きのろう学校を次々と作ったことである。二つ目は、これらの学校でアメリカ手話を用いたことである。

1957年ガーナのアクラに西アフリカで最初のろう学校を開き、以後約30年間で13カ国に31校のろう学校を開設した(図参照)。英語圏だけではなく、フランス語圏(旧フランス、ベルギー領)にも事業を展開した。ガーナで初めてのろう学校には国中から広くろう者が集まり、またナイジェリアとカメルーンでは国内二番目のろう学校となった(Van Cleve ed. [1987: vol. 2: 242; vol. 3: 78], 亀井 [2000: 92])。

これらの学校で、教員はアメリカ手話を用いた。世界各国で口話法ろう教育が主流であった時代に、聞こえないこどもになじみやすい手話で教育をしたことは、世界的に見ても先進的な取り組みであった。ナイジェリアやカメルーンにはすでに口話法のろう学校があったが、フォスターはそれらとは別に、手話による教育の拠点となるろう学校を作り、卒業生を送り出した(Van Cleve ed. [1987: vol. 2: 242], 亀井 [2000: 92])。

後年、彼はその業績をたたえられ、母校ギャロデット大学から博士号を授与された。しかし1987年、活動のさなかるワンダで航空事故に遭い、62年の生涯を閉じた(CMDウェブサイト [2002年 6月27日閲覧])。

4 フォスターが残したもの

フォスターの事業が残した影響を、教育の側面、コミュニティと手話の側面の両方から見てみたい。

まずこの事業は、アフリカのろう者が学校に通い、一部は高等教育まで進学することのできる機会を提供した。ナイジェリアのろう学校は1979年から中等教育を開始、一部の生徒をアメリカの大学に留学させ、ろう者の教員を養成する事業を展開した(Van Cleve ed. [1987: vol. 2: 243])。

一方、ろう者がろう学校に集まり、周辺にコミュニティが発展した(Lane et al. [1996: 199])。フォスター以前のろう者の状況についての記録や証言はまだ見られないが、小規模なろう者の集まりや個人が、都市や村落にまばらに点在していたと推定される。寄宿舎付きのろう学校は聞こえない人たちの人口集中をもたらし、手話言語社会の成立を促したと考えられる。

このコミュニティに、フォスターはアメリカ手話を与えた。学校の中や外で、それまでアフリカにはなかった手話が話されるようになった。少なくとも、ガーナ、ナイジェリア、カメルーン、ブルンジでは、現在もアメリカ手話またはその影響を強く受けた手話が話されている(Van Cleve ed. [1987: vol. 3: 78], シュマーリン [1998: 54], 亀井 [2000: 94], Lane et al. [1996: 198])。

5 事業に対する評価

フォスターの事業に対する評価は分かれる(Lane et al. [1996: 199])。彼が教育にアメリカ手話を用い、地域の手話を用いなかったことに対する批判がある。フォスター以前の手話の状況については報告が少ないが、一部の地域ではアダモローベ手話(ガーナ)、ハウサ手話(ナイジェリア)などアフリカ由来の手話が話されており(Van Cleve ed. [1987: vol. 3: 78-79], シュマーリン [1998: 54])、これらを重視する立場から、アメリカ手話による教育を批判する意見もある(シュマーリン

[1998: 54])。

今日、世界123の国・地域のろう者組織が加盟する世界ろう連盟は、外国の手話よりも各国で発達した手話を尊重するべきであるとの方向性を示している(世界ろう連盟 [1993: 19])。もしも今の時代にフォスターと同様の事業が展開されたとすれば、アフリカの人たちの反発を買うことになるかも知れない。

一方で、彼はアフリカのろう者たちから尊敬されている。ろうのこどもたちが教育を受ける機会を得たのは、彼の事業のおかげである。筆者がインタビューしたカメルーンのろう者たちは、フォスターを偉人としてたたえる。彼の不慮の死は、惜しまれる出来事として今も語り継がれている。また、ろう者のコミュニティ形成を促した側面も重要であろう。カメルーンでは、アメリカ手話は伝承と伝播を繰り返す中で変容し、ろう者の教会やスポーツサークルなどで普通に話される手話として普及した(亀井 [2000: 93-97])。

アフリカのろう者にだれも関心を持っていなかった時代に、フォスターはろう学校と手話による教育の重要性を知り、事業として実践した。この功績を軽視することはできないだろう。

6 おわりに

今後、アフリカのろう教育と手話の歴史が明らかにされていく中で、フォスターに対する評価はおのずと定まっていくであろう。その際に、ろう学校の第一の機能である教育面だけでなく、ろう者の人口集中と言語社会形成という第二の機能も合わせて評価する必要がある。人類学的視点においてろう者と手話言語を理解しようとする試みは、まだ始まったばかりである。

【参考文献】

- 亀井伸孝 [2000] 「もうひとつの多言語社会」(仲村優一・一番ヶ瀬康子編集委員会代表『世界の社会福祉 11 アフリカ・中南米・スペイン』旬報社).
- シュマーリン, C. [1998] 「“A” はアップル: ナイジェリア・カノ州における欧米教育と ASL 教育の影響」(中村かれん訳) (『手話コミュニケーション研究』第27号).
- 世界ろう連盟 [1993] 『WFD 組織マニュアル第1集』(全日本ろうあ連盟訳).
- 野村恭也・小松崎篤・本庄巖総編集 [2000] 『CLIENT 21 - 21世紀耳鼻咽喉科領域の臨床 6 . 聴覚』中山書店.
- ピンカー, S. [1995] 『言語を生み出す本能 (上)』(椋田直子訳) 日本放送出版協会.
- Lane, H., R. Hoffmeister and B. Bahan [1996] *A Journey into the Deaf-World*, San Diego: Dawn Sign Press.
- Van Cleve, J.V. ed. [1987] *Gallaudet Encyclopedia of Deaf People and Deafness*, Vol.1-3, New York: McGraw-Hill, Inc.
- Christian Mission for the Deaf (CMD) ウェブサイト, “*Christian Mission for the Deaf*,” <http://members.tripod.com/cmdeaf/index.htm>; “*History of Christian Mission for the Deaf*,” <http://members.tripod.com/cmdeaf/stats/h-cmd.htm>
- Ethnologue ウェブサイト, “*Ethnologue report on Deaf sign language*,” http://www.ethnologue.com/show_family.asp_subid=1

【付記】 本研究は文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)により行われています。世界ろう連盟の高田英一理事より資料提供をいただきました。

(かめい・のぶたか/日本学術振興会特別研究員, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)